市民サロン

このページは市民の皆さんが作るページです。短歌、俳句、川柳などの文芸作品やどんなことでも結構ですので皆さんのご意見をお気軽にお寄せください。
締め切りは毎月10日です。
あて先は南国市企画課市民サロン係（〒783南国市大埇甲2301）です。

国術

毎週木曜日、中央公民館で開かれている陶芸サークル。初心者からベテランまで二十五人のメンバーが、毎回思い思いの作品を丹念に作り上げていきます。
今回は、そのメンバーの宇陀久雄さんと利岡良香さんにインタビュー！

宇陀久雄（うだ）さん（庫山）

趣味でやっている盆栽の鉢を自分で作りたくて6年前から習い始めました。
釉薬（うわぐすり）をかけたりする装飾的なことは、ただかければよいわけではないので何年やってても難しいですね。
今は盆栽鉢にとどまらず、とっくり、皿、刺身用の皿などを作っています。自分で作った杯で飲むお酒、やっぱり格別うまいですね。

利岡良香さん（大埇）

自分の気に入ったものは一年に二、三個できるかできないか。最後の窯出しは楽しみである反面、恐ろしくもありますね。うまく形ができていても、焼き具合で駄目になることなんてしょっちゅう。『今度こそは』と思って、今日まで焼き続けてきました。
焼き物づくり、すっかりやみつきになってしまいました。

妹　よ

葛目義人（岡豊町）

南国歌壇

春長野の上に澄りて余念なき
白鷺は見ゆ少し汚れて　西野田　吉川定子

母と生きししあわせつづる自分史の
青春までを書き終わりたり　後免町　刈谷益子

「ペンを持て鍬を持ちます」きっぱりと
嫁ぎの前の言のよろしき　大埇　中田憲秀

国衙跡めぐりの桜咲き初めぬ
日差しが柔し土佐のまほろば　三畠　有馬一馬

軒下のラッパ水仙ことごとく
匂に合掌し友を迎えん　浜改田　南郷富士子

有り余る国に売るより飢に泣く
民に目を向けウルグァイラウンド　田村　川口岩春

南国柳壇

ま、ごとの花見花嫁春の歌　十市　沢村鶴一

恰幅を終てあんどの座にもどり　十市　大安寿恵子

花粉症わさびロにしまた涙　十市　八松久幸

南国俳壇

花椿落し小鳥の翔ちかわる　大埇　高石杜伎

みどり児に春めく日ざし睫毛にも　大埇　大崎雅子

揺らぐ燭の歌動くかに涅槃絵図　前浜　岩城鹿水

野試合の馳け乱したる冬田かな　日章　沢村節

黄梅に日ざしやわらか寺の庭　稲生　中横淑

鍬先を逸れて寄り来る鶴かな　前浜　竹村佐知

うすらいにふれて父の忌過ぎてゆく　岩村　池さち

和汁の真上最終便通る　岩村　和田ひでみ

湯底に冬の太陽沈みきる　岩村　北岡高子

われら仲間サークル

ハート♡ハウス♡ハート

今回は野田公民館で活動をしている「土佐カウンセリング塾」におじゃましました。

◇　◇

発足したのは昭和五十七年。当時、南国署の婦人補導員だった隅田道代さんたちが、親子関係などでの相談を多く経験する職業柄、少しでもそのお役に立てればとの思いからスタートしたとのこと。
現在の会員は約二十人。毎月第三土曜日の二時から四時まで、野田公民館で行っています。発足当時からのメンバーも五人で、延べ三百人ほどがこのサークルに参加したことになります。
カウンセリングの仕方のほか、ボディ・ワークという心とからだの緊張をほぐし、ストレスから開放する練習も行っています。

サークルのひとりの山本三四子（岡豊町）さんは「ここではありのままの私を出せ、しかもそれをそのまま認めてくれます。職場や地域社会では出せない自分を表すことができます」とにっこり。
また、最近参加した、安芸市から来ている小学校の養護の先生は「カウンセリングを通して、人の内面に触れればと思って。しかも、教師としての仕事にも生かせるかなとも思いました」と入会の動機を語ってくれました。
カウンセラーになりたい方、ゆったりと自己を見詰めたい人、ぜひ一緒にサークルに参加しませんか。連絡は隅田道代（南国市下野田五三七　☎46607）まで

◇　◇

このコーナーでは、同じ趣味を持った方たちの楽しい活動風景を紹介しています。「私たちのサークルを取材してほしい」と思われる皆さん、ぜひご応募ください。
◪応募方法　サークルの代表者の氏名、住所、電話番号、活動場所、それに活動内容を簡単に明記
◪あて先　〒783南国市大埇甲二三〇一　南国市企画課広報統計係

これはなんでしょう

親子クイズ212

答えについての思い出などもお待ちしています。
◪しめきり　4月10日(土)
◪あて先　〒783　南国市大埇甲二三〇一　南国市企画課　親子クイズ係
◪賞品　正解者の中から抽選で5人の方に図書券を進呈
◎第211回親子クイズの答えは、つくしでした。

第211回当選者発表（敬称略）（応募総数32通）
鈴木由紀（大埇）
土居順子（十市）
武政智恵（篠原）
大石佐智江（左右山）
高田静子（大埇）

お便りの中から皆さんの思い出の一部をご紹介します。
◆花びらや葉っぱをしわのできないように丁寧にちり紙に包んで本の間にはさみ、押し花を作ります。忘れたころにハッと気がつき、破れないようにそーっと開いて見るのです。
その色の渋さや透き通るような柔らかさはなんともいえません。その一つに「つくし」もありました。
彼に手紙を書いてつくしの押し花を入れました。「つくしとは誰につくすことかしら」と一言そえたことを覚えています。
三十年も前のことです。
◆子どものころ、四万十川の土手で妹と、バケツにいっぱいつくしを取って家に持って帰り、母を困らせたこともありました。
◆去年の春、サイクリングの途中、つくしをたくさん見つけて、お母さんに卵とじにしてもらって食べたら、春の味がしておいしかったです。
◆小学生のころ、田んぼのあぜ道でつくしやれんげをつんでいて、気がつくとおちこたての真っ白い運動ぐつが草の汁で緑色になっていて、悲しかった思い出があります。